

ダブルグリッドがつくる柔らかなパブリックスペース

八代研究室
01212121 宮城江利

1. はじめに

人口減少にともなう過疎化や高齢化が進む 21 世紀、これからの公共建築のつくりかたとして、本計画では、木材などの建築材料の地産地消を前提とし、従来の大きく堅牢なイメージではなく、小さく柔らかな雰囲気です恒久的というよりもフレキシブルで持続可能なパブリックスペースを提案する。

2. 敷地と計画構想(図 1)

図 1 に示すように、埼玉県行田市の中央、往時の浮城「忍城」を偲ばせる忍沼が今も残る水城公園を敷地とする。水城公園は、昭和 39 年 4 月に開園し、水城公園の北隣に行田市庁舎がある。公園内の忍沼では、地域住民がいつも釣りをしており、市民の憩いの場でもある。しかしながら、近くに気軽に休息できるような空間がなく、とくに酷暑の夏場や北西風の厳しい冬場は人影が少なくなる。そこで公園中央を南北に通過する道路を渡った東側の水城公園の一角に、用途としては、図書館・工房・研修室・飲食スペースのある木造平屋の新たなパブリックスペースを提案する。

3. ユニットの提案(図 2)

3.1 動線としてのダブルグリッド：埼玉産木材の使用を前提とした木造平屋を想定し、6,300mm×6,300mm をひとつのユニットとし、幅 2,700mm の通路空間を有するダブルグリッドシステムを採用した。これにより 1 つの形から様々な空間の展開が可能なユニットを提案することが可能となる。

3.2 寒風対策としてのヒンプン：冬場の寒風対策として、私の故郷の沖縄の民家で多くみられる「ヒンプン」という隠し扉を活用する。本来は石積みだが、ここではガラスを用いることで、動線や視線が遮断されず防犯性も確保できる。

4. 計画内容(図 3)

パブリックスペースとランドスケープを一体のものと考え、敷地内に約 20 種類の庭を配置し四季

折々の自然との融合を計った。また水城公園にとって「水」という重要な自然資源をそれぞれの庭/中庭に取り込み、透明なヒンプンや軒の深い庇越しに様々な景色を楽しめるようにした。

図 3 に示すように、この施設は 5 つのブロック「研修棟」「カフェ」「レストラン」「図書館」「工房棟」から構成され、その内外に各種の庭が混在する。
ユニット 1：研修室(図 4 ①参照)

大講義室と小講義室を 2 部屋づくり、様々な用途に対応できるようにした。北側の部屋に関しては、植栽やヒンプンを取り入れて強風が直接建物にあたらないようにしている。

ユニット 2：食事スペース(図 4 ②・③参照)

一つのユニットを繋げた大空間として活用する。中央部には池があり、池を見ながら食事が可能である。また、池だけではなく中庭があり、茶室庭園のような中庭と、植栽豊かなテラスの 2 種類あり、落ち着いた空間提供をする。

ユニット 3：図書館(図 4 ④・⑤参照)

トイレは内部だけではなく外部からの利用も可能にし、公衆トイレのような役割を果たす。入り口に窓口を設置し、案内がしやすいようにした。自然光活用するために窓際に机を配し、中央部は本棚を設置。また、北側には PC 室、和室を設けた。

ユニット 4：工房室(図 4 ⑥参照)

工房は、左から「制作室」「木工室」「陶芸室」の 3 つの部屋から構成されている。その中でも陶芸室は、制作した作品を窓際に展示し外部から観覧できるように開口部を大きくしている。

5. おわりに

現代のニーズに合わせた、仮設的な小規模建造物を提案する。シンプルで規則正しいグリッドを応用したダブルグリッドを活用することで、人の動線を表現した。行田の町に合った、柔らかい雰囲気の空間の中で休息できるパブリックスペースを目指した。



図1 敷地地図

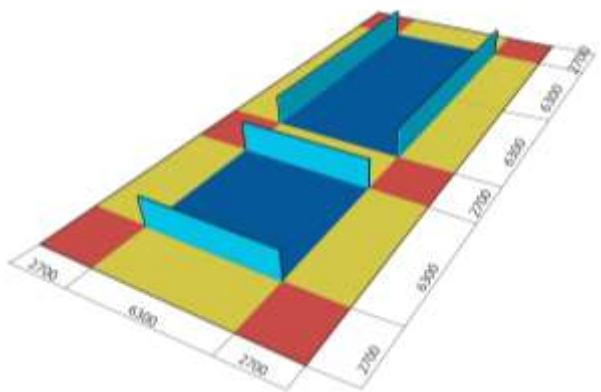


図2 ユニット原型図・ヒンブン

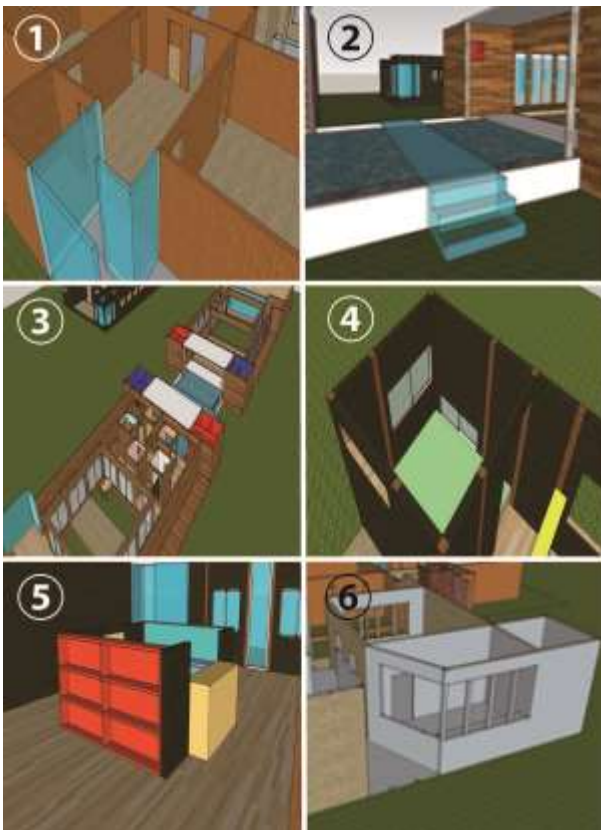


図4 内外観透視図

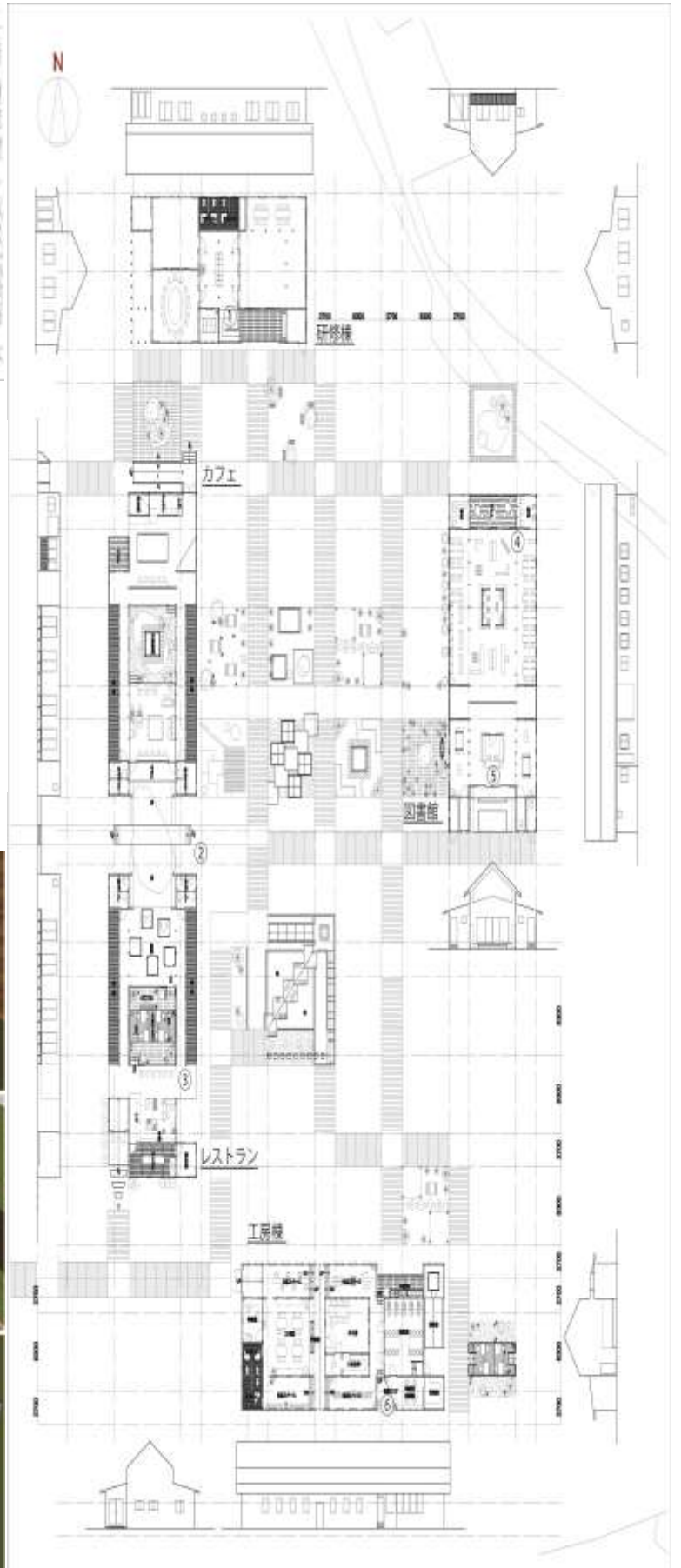


図3 配置平面兼立面図